

KAZAMIの新米コーチは 特殊な体質持ち…

アニアス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある高校生、金城獅狼

彼は誰にも明かせない秘密があるのだが、あることをきっかけにジェットバトルの世界へと踏み込んでいくのだった

目次

	プロローグ	1
	第1話 誘拐	8
	第2話 硬直	17
23	第3話 KAZAMIの練習風景	

プロローグ

ここは日本のどこかに位置するとある公立高校。

今は休み時間で、生徒たちは友達と話したり勉強の予習をしたりと各々自由に過ごしている。

そんな普通の高校のある教室。

窓際の席で机に顔を伏して眠っている男子生徒がいた。

髪は銀髪のウルフカットでやや高身長、そして少し目付きが鋭い男子が気持ちよく眠っていると不意に話しかけられた。

「オイオイ獅狼！ 昼寝するにはまだ早えだろ！」

ハイテンションな声に彼は重い目蓋をゆっくりと開き顔を上げては相手にだるそうに返す。

「俺が何しようが勝手だろ……つたく、人が気持ちよく寝てる時に起こしてくるんじゃないねえよ」

彼の名は『金城獅狼』

どこにでもいる普通の男子高校生。

部活に属してはいないが助っ人として運動部に呼ばれる程の運動能力があり怒ると凄く怖い性格である。

「いいじゃんかよ。眠そうにしてる親友の眠気を吹き飛ばしてやったんだからさ」
「誰が親友だ」

先程からハイテンションな彼は『橋澤輝樹』

獅狼とは中学からの付き合いでいわゆる腐れ縁である。

相変わらずの輝樹のテンションに獅狼はツツコミを入れつつ体を起こして伸びをし
て話に付き合うこととなった。

「ところで昨日のジェットバトル見たか？」

「…見てねえよ。大体興味ねえし」

「カーツ！なんて勿体ないことを！それでも日本人か！」

2人の会話に出てきたジェットバトルというのは、最近話題沸騰になっている女性限定の海上スポーツのこと。

獅狼はまったく興味が無いが、輝樹はドップリと嵌まってしまっている。

「とにかく見ろよ！昨日の大会のダイジェスト動画がアップされてるから！」

興奮を押さえきれない輝樹はスマホを操作して動画投稿サイトに上げられている1つの動画を再生して獅狼に見せた。

面倒くさそうにする獅狼ではあるが、渋々スマホに視線を向けて見ると、昨日のジェットバトルの動画が流れていた。

水上バイクのような乗り物に乗っている選手たちがフィールドである水上を駆け回り、後部座席に同乗する選手たちが銃のようなもので撃ち合っていく。

互いにぶつかり合う白熱した姿に観客たちは力一杯声援を送っていた。

動画を見ている獅狼に輝樹は改めて問いかけた。

「さあ獅狼よ、これでジェットバトルの魅力が」

「分かんねえ」

「即答かい！」

相変わらずのジェットバトルの興味の無さに輝樹はツツコミを入れてしまう。

輝樹にしつこく言われて獅狼自信も何度も見返したものの、自分でも分からないほどの興味がまったく湧かなかった。

「お前だつてゴルフとか興味ねえだろ？それと同じだ」

「マジかよ……じゃあせめて選手の顔だけでも覚えとけよ。特にこのチーム」

獅狼をジェットバトルファンにさせるのを諦めきれない輝樹は動画で優勝をしたチームを指差す。

そのチームは『KAZAMI SEA TEC』という企業からのチームで今

一番勢いがあるチームらしい。

「ちなみに俺のオススメはライダーの相馬」

「ハイハイ分かった分かった。後で見とくから」

「聞けよ！」

説明しようとした輝樹を適当にあしらうと、獅狼は窓の外を眺めて切り上げたのだつた。



学校のすべての授業が終わり夕方。

学校を出た獅狼はいつも絡んでくる輝樹から逃げるためにまっすぐ家へと帰っていた。

そしてしばらくすると『金城駄菓子』と書かれた看板が掛かっている木造の家へとたどり着いた。

獅狼の実家はこの駄菓子屋で近所の子供たちがよく足を運んできてくれる。

「ただいまバツチャン」

「あらお帰りシロちゃん」

中に入ると出迎えたのは獅狼の祖母のみや子。

獅狼はここで祖母と2人で暮らしており将来はこの店で働くことを決めている。

「お風呂沸いてるから入りなさいよ」

「分かった〜」

そのまま2階へと上がり自分の部屋に入ると布団に寝転がる。

しばらく天井を眺めてポーツとしているとスマホを操作して輝樹が見せてきたジエツトバトルの動画を再生した。

その他にもいろんな動画を再生したもののポツリと呟く。

「……………やつば全然魅力が分からねえな」

獅狼からすればただ水上バイクを操作して撃ち合う、それだけした感想が出てこなかった。

選手にも注目してみたが、それでも心が動かされない。

どうしてここまでジエツトバトルに興味がないんだろうと獅狼はしばらく考えと、ふとあることを思い付く。

「…やってみるか」

動画サイトを閉じて次に開いたのはツイッター。
しばらくスマホを操作しては獅狼はあることをネット上に呟いた。

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □

昨日のジェットバトルの大会を見たけど

正直何も伝わらなかつた

そもそもジェットバトルすらまったく興味が湧かない

誰でもいいから魅力を教えてほしい

□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □

輝樹から耳にタコができるほどジェットバトルの凄さや魅力などを聞かされたが、獅狼は敢えて第三者の意見を取り入れることにした。

そうすればいろんな意見が出てくる筈だと浅はかではあるもののこれしか思い付かなかつたのである。

「……風呂にでも入るか」

ツイッターで呟いても何のコメントがつかないのが大半のため、獅狼はあまり期待せずスマホを落とし部屋を後にした。

しかしこの投稿が、後々獅狼の人生を大きく揺るがすことなど誰も知るよしはなかったのだった……

第1話 誘拐

(……………なんでだ?)

「この事について詳しく聞かせてもらおうかしら? 金城獅狼!」

(なんでこうなったんだ!?)



遡ること1日前。

今日は土曜日で学校も休みのためいつものように獅狼が駄菓子屋の店番をしていた時だった。

「ほら、キャベツ太郎2袋な」

「ありがと兄ちゃん!」

お客さんである近所の子供を見送るとポケットからスマホを取り出してツイッター

を確認した。

先週投稿した眩きに対する反応は0で誰からも見られていなかった。

「…まあいいか」

この事に少し落胆してしまいが特に気にすることもなくスマホをポケットへと戻す。ジエツトバトルに興味が湧かなくてもいいためもう忘れようとした時だった。

「いらつしやいま…」

新しく来た客の相手をしようとした時、獅狼は言葉を途切らせてしまう。

何故なら入ってきたのは黒いスーツにサングラスをかけた体格のいい男だったからだ。

しかも1人だけでなく同じ服装の男たちが次々と押し掛けて来たため獅狼はワケが分からず戸惑いを露にする。

「あ…えつと…?」

「金城獅狼様、ですね?」

戸惑う獅狼に対して、黒服の1人が口を開いて質問をしてきた。

どうやらこの黒服たちは獅狼のことで尋ねてきたようで、獅狼は反射的に頷いてしま

う。「そう、ですけど……」

それを聞いた黒服たちはアイコンタクトを取ると一斉に獅狼を取り囲んだ。

「はっ!? えっ!?」

「申し訳ありませんが、貴方を連行します」

「レ、レンコウ!? どういうことだよ!? 意味わかんぬムグウ!?」

あまりの唐突すぎる展開に抗議しようとしたのも束の間、獅狼は頭から黒い布を被せられそのまま意識を失ってしまったのだった。



(……………ん?)

一体どのくらい時間が経過したのか、意識を取り戻した獅狼だったが布を被せられ何も見えない状態だった。

そしてあの黒服たちに拉致されたことを思い出して動こうとするが、何故か体が動かせなかった。

ここは一体どこなのか、何故自分は拉致されたのかまったく理解できず獅狼が混乱し

ているその時、被せられた布が脱がされた。

急な眩しさに目を細めてはゆっくりと目を開くと…

「ようやくお目覚めかしら？」

目の前にいたのは金髪のツインテールを携えている小柄な女の子だった。

金髪の女の子はまるで威張っているかのような振る舞いで獅狼を目で捉えていた。

目の前の彼女も気になるが、それよりも獅狼は今の自分の状況に驚いてしまう。

「はっ!? んだよこれ!？」

椅子に座っているものの、縄で縛られて身動きが取れない状態にあった。

必死になり抜け出そうとするがきつく縛られて抜け出すことができなかった。

獅狼は目の前の金髪の女の子へ視線を戻すと睨み付けて声を荒げる。

「ふざけんなテメエ! これは何のマネだ! 縄ほどけ!」

「ひい!?! そんなに怒らないでよお…!」

獅狼の迫力に金髪の女の子の強気な態度が消え去って小鹿のように震えてしまう。

しかし突然拉致されてワケの分からない状態にされたのだから獅狼が怒るのも無理はない。

再び部屋を見渡すといかにも高級そうなインテリアが置かれている一室だったためここがどこなのか分からずにいると、威勢を取り戻した女の子が再び口を開いた。

「んんっ！さて、アンタが金城獅狼ね。見るからにTHE庶民ってオーラが出てるわね」
「失礼だなオイ」

真っ先に悪口を言われて獅狼が反論すると、あることに気がついた。

「あれ？どつかで見たことあるような…」

目の前の生意気そうな女の子とは初対面の筈なのに何故か顔だけはどこかで見た覚えがあった。

しかし一向に思い出せずにいると女の子が自ら自己紹介をし出した。

「まあ本土の出身が知らないのも無理はないかもね。アタシはKAZAMIの令嬢の風見エレンよ！」

金髪の女の子『風見エレン』の名前を聞いたと同時に獅狼は彼女のことを思い出した。
「風見エレン…あつ、確かジエツトバトルに出てた…！」

輝樹が応援してるKAZAMI SEA TECのリーダーがこの風見エレンだったのである。

しかし獅狼は今に至るまでエレンどころかKAZAMIすら関わりを持ったことがないためどうして連れてこられたのか理解できなかつた。

「で？天下のKAZAMIのご令嬢様が俺に何の用だよ？誘拐までしやがって」

「それについては悪いとは思ってるわよ。けどこれは、アンタ自身が蒔いた種でもある

んだからね」

「俺が？」

KAZAMIを怒らせる心当たりがなく首を傾げる獅狼にエレンは懐から一枚の紙を見せつけた。

それを見た獅狼は心の中で『あっ!?!』と声を上げてしまう。

「これを投稿したの、アンタよね？」

そこに記載されていたのは、1週間前にツイッターで呟いたものだからであった。



そして現在。

「あの大会で優秀の美を飾ったアタシたちに魅力を感じなかったとはね…呆れて何も言えないわ」

たかが軽い気持ちでSNSで呟いたことが拉致されることに繋がることなんて想像もしなかった獅狼からジェットウェブの興味の無さを聞いたエレンは腕を組んで目

付きを鋭くする。

「俺もまさかあの眩きでワダツミまで連れてこられるなんて…驚きのあまり何も言えねえよ」

今獅狼がいるここは『ワダツミ』と呼ばれる本土の南に位置する人工島。

ジェットバトルもここでしか行われておらず、選手や職員のためにスパーや病院はもちろん、学校までの施設が揃っている。

本土からワダツミまでKAZAMIのプライベートヘリで獅狼は連行されたのだつた。

これから自分はどうなってしまうのだろうかと獅狼が身構えていると、部屋の扉が開いて数人の女性たちが入ってきた。

「ここにいたんだエレン…と、誰？」

「もしや先週エレンさんが見つけた眩きの発信者では？」

「拉致してやると息巻いていたが本当にやるとは…」

入ってきたのは褐色の日焼け肌に紫陽花色の髪を纏めているどこかフワフワしている女の子、腰まで伸びている青い髪を靡かせる凛とした女性、そして白い髪の外国人らしき女の子の計3名。

それを見た獅狼は彼女たちもジェットバトルの選手であることを思い出したのだつ

た。

すると白髪の女の子が獅狼の後ろに立つと縛っていた縄をほどき出す。

「エレンが失礼なことをしたな。申し訳ない」

謝罪を受けては縄がほどかれると獅狼は立ち上がり拘束からようやく解放されたのだった。

「ふう助かった…一事はどうなるかと思つたぜ」

「いやはや、本当にすまない。私はジュネー・ヴァイスベルグだ」

「永雪氷織です。ポジションはライダーです」

「…相馬颯」

3人と自己紹介をしているといつの間にか空気と化していたエレンが口を開いた。

「ちよつと！何勝手に縄ほどいてるのよ!？」

「エレン、君のしたことは完全な誘拐・拉致だ。今回は流石にだめだろ」

「いくら何でも、やりすぎだと思う…」

「激昂せず冷静になりましょう」

「ぐぬぬ〜！」

3人からぐうの音も出ない程言い負かされてはエレンは悔しさを露にする。

そんなエレンに獅狼は追い討ちをかけるように質問をした。

「なあ、結局お前は俺をどうしたいんだ？ いい加減家に返してほしいんだが？」

いつまでこんな茶番に付き合わされるのだろうかとけだるそうな獅狼にエレンは咳払いをして本題に入った。

「そ、そうね。単刀直入に言うわ金城獅狼……………」

貴方はこれから、KAZAMIのコーチになつてもらおうわ！

「……………は？」

第2話 硬直

KAZAMIの令嬢の風見エレンからジェットバトルのコーチ任命を受けた獅狼は突然のことに固まってしまっている中、同じチームであるジュネーから待ったの声がかかった。

「待ちたまえエレン。流石にそれは唐突がすぎるのではないか？彼の了承もまだだろう」

「…そ、そうだ！いきなり何言い出してんだよ！それに俺はジェットバトルに関しちゃうルールすら分かんねえんだぞ！」

ジュネーに便乗して獅狼も慌てて反論する。

ジェットバトルの右も左も分からない自分なんかをどうしてコーチにすると言い出したのか理解できずにいるとエレンが得意気に話を続ける。

「もちろん承知の上よ。けど金城獅狼がジェットバトルのコーチになれば次第に興味を湧いてくると思うの。それに、ちょうどコーチに空きが出ちゃったから都合がよかったわ」

ツイッターの眩きの意を汲んでの突拍子すぎる行動に呆気にとられる獅狼だが、ふと

疑問に思うことがあった。

「ちよつと待て、コーチに空きが出たってどういうことだ？」

ジェットバトルに関してまったく知らないわけではない獅狼はKAZAMIが強豪であることの知識は頭に入っている。

そんなKAZAMIにコーチが不在だということに首を傾げていると氷織と颯の2人が説明した。

「実は前のコーチが実家の農業を継ぐことになり退職されてしまったのです」

「だから今のKAZAMIには、コーチがいない……」

「そう、なのか……イヤイヤだからと言って素人コーチに任命すんなよ！」

KAZAMIの現状を理解した獅狼であったものの、やはりコーチなんてできないとエレンに再び抗議する。

「何よ。魅力教えて欲しいって言ったのはそっちでしょ？」

「だからと言ってここまでするか普通!?それに俺来月から高2になるんだぞ！」

「安心しなさい。既に手回しは完了してるから」

エレンがパチンと指を鳴らすと部屋に1人のメイドが入ってきた。

彼女が獅狼の側まで流れるように歩くと1枚の書類を差し出してきた。

そしてそれを見た獅狼は絶句してしまふのだった。

「は…？海津見学園への転入届…!？」

転入届には海津見学園の学園町と獅狼の通う本土の学校の校長のサインが既に記載されていた。

「アンタの実家の荷物も既に手配済みだから今日中にはここに届く予定よ。それから家族のおばあさんには学園からのスカウトで話は通してるから」

「どんだけKAZAMIの権力フル活用してんだよ!？」

学園の転入手続きからワダツミへ実家の荷物の手配など何から何まで進められてしまっていることに獅狼は突っ込むことしかできなかつた。

ここまで来てしまったからにはもうどうすることはできない。

啞然となる獅狼に対してエレンは別の書類を差し出してきた。

「じゃあこれ、KAZAMIのコーチになる契約書だからここにサインして」

「ふざけんなよマジで…!？」

ジェットバトルについて教えて欲しいと言ったのは確かだが、そこまで願望してないのも事実。

それがここまで事態を大きくしたエレンに怒りしかなかった。

一体自分を何だと思っているのかと同時に獅狼はそのまま部屋を出ようとする。

「こんなこと付き合ってられるか！俺は帰る!」

「あつ！待ちなさい！庶民の分際でこの風見エレンの粹な計らいを蹴るつもり！」

そして逃がすまいとエレンが獅狼の手を掴んだその時だった。

「がっ…!?!」

獅狼が呻き声を上げたと同時にその場に仰向けに倒れ込んでしまった。

そのまま動かなくなった獅狼にエレン含めてジュネーも氷織も颯も驚いてしまう。

「えっ!?!ちよ、ちよつと！どうしたのよ!?!」

「エレン、突き飛ばすのは…」

「今回ばかりは度が過ぎてるとは思ったが、まさかの突き飛ばすとはな」

「違うわよ！私は突き飛ばしてないわよ！」

「はい。エレンさんは手を掴んだだけですから突き飛ばしてません」

「お嬢様」

するとエレン専属のメイドが獅狼の今の状況について説明をしてくれた。

「私たちが調べた情報によりますと金城獅狼様は異性に触れる、もしくは触れられると全身が硬直して約5分間動けなくなるそうです」

『……………え?』

聞き間違えたのかと思えるほどの情報を聞いた4人はうつ伏せで倒れている獅狼を再び見ると、意識だけはハッキリとしていた。

実は獅狼はいつからか異性に触れるだけで体がフリーズしてしまう特殊な体質を持っており、手を合わせるだけでもアレルギー発症のように体が拒絶反応を起こしてしまっているのである。

ちなみに身内の祖母とではそのようなことには至らないが、見知らぬ異性とだと必ずこうなってしまう。

「くっ……しまった……」

しかしまったく動けないワケでもなく、動かせる頭を上げるといつの間にかエレンが目の前に立っておりこちらを見下ろしていた。

しかしその顔はまるで悪魔のような笑みを浮かべており、その場にしゃがんでは契約書突き出してくる。

「じゃあ動いてからでいいからこれにサインしなさい。もし拒否するならば……永遠にここから動けなくなるわよ」

そう言うときエレンは獅狼の頬に手を添えて脅しとも言えるような交渉を持ちかけてくる。

「ま、待て……！ た、助け……！」

「ふむ、実に興味深い現象だ」

「ホントに固まつてる…」

「どうやら皮膚による接触で起きるようですね」

ジュネーたちに助けを求めようとするが、獅狼の体を指でツンツンと突いたり手を触つたりとおもちやのように扱う始末。

もはやこの部屋において獅狼の味方は誰一人としていなかった。

「さあ選びなさい！サインするか！それとも永遠に動けなくなるか！」

「く、くっそお〜…!!」



そして数十分後、ようやく解放された獅狼は泣く泣く契約書にサインをしてKAZA MIのコーチとなるのだった。

第3話 KAZAMIの練習風景

「んんっ……」

どこからか聞こえる鳥の鳴き声と差し込む日差しに獅狼がゆっくりと目を開くと最初に映ったのは知らない天井だった。

そのままゆっくりと体を起こすと駄菓子屋がある実家の自分の部屋ではなかったことに獅狼は深くため息をついてしまう。

「…全部夢だったらよかったのにな」

昨日ジェットバトルのコーチになるための正式な契約を結んだ後、ワダツミの居住区にある一軒家に住むことになり、ジェットウエーブの説明や海津美学園の転入準備などをようやく終えたのである。

獅狼はベッドから起き上がると部屋の換気をするために窓を開けた。

そのまま外の景色を眺めると目の前には海が広がっておりカモメも鳴きながら飛んでまさしくリゾート地なのだが、風見エレンにより振り回された獅狼の心は晴れることはなかった。

「もうヤダ……このまま走って逃げ出してえよ……」

「じゃあ一緒に走る?」

「んあ?」

すると不意に声が聞こえては窓から顔を出して左を見るとKAZAMIの選手の人である相馬颯がそこにいた。

「相馬? 何でここに…?」

「私は朝と夜、毎日ランニングしてるから…そのついでに獅狼さんを迎えに行くように、エレンから頼まれたの」

「それはご苦労なことで…仕度するから待つてくれ」

迎えに来てくれた颯をその場に待たせては出かける準備を始める。

動きやすい服に着替えては洗面所で顔を洗い髪に整髪剤をつけると、家を出て颯と改めて挨拶する。

「悪い、待たせたな」

「大丈夫。じゃあランニングで行こ」

「え? 走るのか? バスとかの方が速いんじゃない?」

「そんなに遠くないから大丈夫」

ジェットバトルの選手や職員はバスなどの公共機関を半額で利用可能で獅狼にとつてはかなり便利のだが、朝から走ることに少しだけ抵抗の色を見せる。

朝は苦手のためバスを使いたかったのだが、颯はお構い無しに走り出した。

「行くよ」

「ちよっ!?!ちよっと待てよ相馬!」

そのまま獅狼は慌てて颯の背中を追いかけるのだった。



「はあ、はあ、はあ……!」

しばらくして、獅狼と颯は昨日一悶着あったエレンが住んでいる屋敷前へと到着したのだが、獅狼は膝に手をつけて息を切らしている。

近いと言ってもそれはあくまでジョギングを日課としている颯の立場でのこと。

結局獅狼は数キロジョギングする羽目になったのである。

「お前……!絶対バス乗った方が早かったろ……!」

「ごめんなさい……つい、夢中になっちゃって……」

「……いや、運動になったから良しとすることにする」

涼しい顔をして謝る颯に呼吸を整えた獅狼は手で静止して膝から手を離す。

「ま、相馬とジユネーと永雪さんは常識があるからいいけどよ」

「…エレンも、一応常識はあるけど」

「はあ？あんなんが常識あるわけねえだろ」

勝手にジェットバトルのコーチに指名した挙げ句、勝手に学校の転入まで手を回したエレンに対して獅狼はまだ信頼できていないのである。

「KAZAMIの令嬢だかなんだか知らねえけど、あんなの我が儘が服着て二足歩行してるだけだろ」

「獅狼さん…」

「いや相馬、言いたいことは分かるぞ。友達が悪口言われるのは気分が悪いかもしれないけどどこればっかかりは」

「そうじゃなくて、後ろ…」

「んあ？」

その時、ピトツと獅狼の首後ろに冷たい感触が伝わった。

それはまるで一瞬に全身へと広がって獅狼も冷や汗をかいてしまうものの、全身が硬直してはそのまま仰向けに倒れてしまう。

「あ、あがが…！」

「誰が我が儘が二足歩行してるですって…!？」

そんな獅狼の後ろに仁王立ちしていたのはKAZAMIの令嬢にして獅狼をコーチに就任させた元凶の風見エレン。

たまたま2人の会話を聞いては獅狼の首筋を後ろから触ったのである。

「てめっ…！ちよつと悪口言われたからつて、触るんじやねえよ…！」

「KAZAMIのコーチがこんな無様な体質を持つてるなんて他の企業に知られたら恥
だわ。耐性をつけさせるための特訓だと思つて感謝することね」

そう言つてはフンツと顔を反らすエレン。

プライドも高く短気な性格が露となつてゐる。

「さ、いきましよう颯。朝ごはん用意してるから」

「分かつた」

「へっ？ちよつと待て！俺をこのまま置いていく気か!? オイ風見!？」

そのままエレンは倒れてる獅狼をほつたらかしにして颯を連れて屋敷へと入つて
いった。

朝から走らされた挙げ句にご飯にもありつけない状況になりそうになる中、獅狼に救
いの声がかかる。

「何をしているんだ君は？」

「おはようございます。獅狼さん」

それは同じKAZAMI所属のシュネー・ヴァイスベルグと永雪氷織だった。

どうやら2人ともエレンに朝食に誘われて今来たようである。

「あの我が儘令嬢にやられた…」

「…ああ、エレンのことか。だが察するに獅狼くんが余計なことでも言ったのではないか？」

「…ノーコメント」

年もそんなに離れていないにも拘わらず年上のような口調のシュネーに問いかけられても獅狼は不機嫌そうに返す。

「それにしても獅狼さんは女性恐怖症でもないのに、どうして異性と接触すると硬直するのでしょうか？」

「ふむ。確かにこれには興味があるな…」

「俺が知りてえよ」

獅狼は女性に対して恐怖や過去のトラウマもないためどうしてこんな体質を持つてしまったのか、専門家ですら分からず今に至っており、日常生活でも気にしているのである。

「さて、流石にこのままでは可愛そうだ。ヒオ、獅狼くんを運んで上げよう」

「分かりました」

「へ？ま、待った永雪さん！」

次に永雪が獅狼に手を伸ばすと皮膚に触らないように配慮しては膝の後ろと背へ手を回してはそのまま持ち上げる。

いわゆる、お姫様抱っこをされた獅狼は顔を赤くしてしまう。

「も、もう俺…お婿に行けない…！」

いくら動けないとはいえ、成人してる年上の女性にお姫様抱っこをされるのは死ぬほど恥ずかしいこと。

顔を隠そうにも指も動かせないためそれでもできず、羞恥で真っ赤な顔が露になってしまっている。

「あのままにしておくワケにも行かないだろ？」

「では参りましょう」

「イヤだー！下ろしてくれー！」

そしてシュネーと獅狼をお姫様抱っこしている氷織はそのまま屋敷へと入っていくのだった。



あの後色々あった獅狼だったが、今はKAZAMIが管轄しているジェットバトル専用の施設に来ていた。

ここではKAZAMIの選手たちが日々ジェットバトルのトレーニングを行っておりかなりの広さがある。

そして獅狼はというと、この施設内の一つであるトレーニングルームにいた。

エレンから準備が終わるまでここで待つておくように指示されたため黒いジャージ姿でエレンたちが来るのを待つているのである。

「にしても流石は大企業、設備にも金かけてるなあ…」

トレーニングルームを見渡すと、ランニングマシンなどの機器も最新型のものばかりが並んでいて触るのを躊躇してしまう程だった。

実家が近所の小さな駄菓子屋の獅狼にとっては住む世界が違っていった。

「KAZAMIって、俺の予想よりも数倍以上の資金力があるんだな」

「やっとなんかKAZAMIの偉大さをようやく理解したようね」

すると聞きなれた生意気な声を掛けられて獅狼が振り向くと、エレンたち四人がト

レーニングルームへ入ってきたところだった。

エレンたちは全員、紺を基調としスカイブルーのラインが入っているウェットスーツのようなものを着用していた。

「…それ、KAZAMIのジャージか？」

「ええそうよ。動きやすくて体にフィットするの」

「ふーん？ 日焼けしなさそうだな」

KAZAMIのロゴが入っているジャージは彼女たちのボディラインが露となっていたため、じつと見る獅狼にエレンが警戒心の視線を向ける。

「言っておくけど、手を出すのは厳禁だからね。まあ私たちみたいな魅力のある体に目を奪われるのは仕方ないと思うけどね」

「安心しろ。少なくともお前みたいな幼児体型に興味はねえっ!」

余計な一言を言った獅狼は眼前から迫ってくるエレンの手をギリギリでかわした。流石に何度も触られる獅狼ではないためかわすことができたのである。

「ぐぬぬぬ〜！ バカにして〜！」

「エレン、そこまでにしないか。獅狼くんもエレンをからかうのも程ほどにしたまえ」
「へーへー分かりやした〜。で？ 何すればいいんだよ？」

シユネーから仲裁を受けて獅狼はコーチの仕事を聞こうとする。

乗り気ではないものの住んでいる場所はKAZAMIが用意してくれてるためコーチとしてやれるだけやろうと吹っ切れている。

「取り敢えず今日は見学だ。僕らの練習風景を見ているだけでいいから雰囲気だけでも目に焼き付けておいてくれ」

「リョーカイ」

取り敢えず経験のない獅狼はKAZAMIの練習風景を見学することになったのだった。



それから数十分が経過。

獅狼はパイプ椅子に座りながらKAZAMIの練習風景を眺めていた。

ランニングマシンやフィットネスバイクなどを使用してエレンたちは練習メニューをこなしているが、獅狼にはどうしても腑に落ちないことができた。

「ん〜……」

「どうかしたの?」

神妙な顔つきの獅狼に側でランニングマシンの上を走っている颯が話しかけてきた。

「いや、4人ともバラバラの練習メニューだから気になってな…」

颯はランニングマシン、エレンはバランスボール、そしてシュネーと氷織はロデオマシンでトレーニングしているためまるで統一性がないように感じていた。

それに強豪チームのためにつきりハードトレーニングかと思いきやそうでもないため疑問に思う中、颯が答えた。

「それぞれに合わせたトレーニングメニューを組んでるのは、オーバーワークを防ぐためみたいなの」

「へー」

無理で体を壊さないKAZAMIのトレーニング方針に獅狼は感心の声を漏らしてしまう。

「にしちやあ相馬よ、少し飛ばしすぎじゃね?」

「あ……つい夢中になって、気がつかなかった」

「お前ホント走るの好きだよな…」

ランニングを日課としている颯に呆れながら立ち上がった獅狼はバランスボールに乗っているエレンの元へと向かった。

エレンは獅狼の顔を見るや不機嫌そうな顔になってしまふ。

「何よ?」

「いや、バランスボールつてそんなに効果あんのかなつてよ」

「…はあ、これだから庶民は」

純粹な獅狼の質問にエレンはため息をつきながらも説明をしてくれた。

「バランスボールはダイエツトだけじゃなくて、姿勢矯正の効果もあるの。マシンはバランスも重要視されるから結構効くのよ」

「ふーん?…その割に左に傾いてるのは気のせいかな?」

「へ?」

獅狼に言われて確認すると、エレンの重心はやや左へとかかっっており慌ててバランスを取り直した。

解説を終えた途端、恥を晒してしまったエレンは顔を赤くしながら声を上げる。

「わ、わざとよ!アンタが気づけるかどうかテストして上げたのよ!」

「……………」

「何なのその目は!?!この風見エレンの言うことが信じられないワケ?!」

ギヤーギヤーと喚いているエレンを見て、獅狼は改めてめんどくさいなと思うのだった。



トレーニングルームでのメニューを終えた一行が向かった先は、屋外プール。マシンを乗り回しや狙撃の練習ができる場所でかなりの広さを持っていた。

そこで獅狼はガンナーであるシユネーと射撃場へ来ていた。

「これがジェットバトルで使うエネルギー銃か……結構種類があるんだな」

獅狼の目の前に並べられているのはハンドガンやライフル、ミニガンなどをモチーフにしたエネルギーだった。

これらはすべて実弾ではなく人体に影響のないもので選手自らかスタムする場合もあるが、KAZAMIでは専門のメカニックがメンテナンスを行っているようである。

「ああ、状況に応じて使いこなすのも駆け引きになるんだ。ちなみに私の得意分野はこれだ」

そう言ってシユネーが手に取ったのはライフル型のエネルギー銃。

遠距離からでも狙撃ができる代物である。

「では始めるとしよう」

そしてシュネーが足元のボタンを押すと、周囲の装置が起動しターゲットがホログラムとして出現した。

これはKAZAMIに限らず他の企業も兼ね備えている最先端のシステムで獅狼が啞然となる中、シュネーはターゲットに照準を合わせ1つ1つを正確に撃ち抜いていく。

そして瞬く間にターゲットすべてを全弾命中させたのだった。

「すげーな……」

「こういったテクニックは理論もしっかりしていれば、如何なる状況でも効果を発揮できるものだよ」

感心してる獅狼にシュネーはガンナーとしての持論を説明する。

つまり素人の獅狼でもその理論を理解すればシュネーのような正確な射撃ができるということである。

「なるほど……でもコンデイションとかは大事だろ。そんな寝不足で目がショボショボしてる状態だと精度も落ちるだろ」

「……よく分かったな。どうやら獅狼くんは僕らが思っているよりも観察力が鋭いみたいだな」

寝不足を見破られたシユネーは驚くものの獅狼の観察力に感心してしまう。

そんなことなどお構い無しに獅狼はこの場から離れて他のところを見に行くことにした。

「んじゃあ他のところ見てくる」

「分かった。僕も少し休憩することにするよ」

シユネーのところを離れて獅狼がプールの方へと向かうと、颯と氷織の2人がマシンを操作して水面を駆け回っていた。

颯もとんでもなくスピードを出しているがかなりの高度なテクニックを持ってマシンを操作しており、氷織は更にその上を行っていた。

「…動画で見るより迫力あるなあ」

すると氷織がこちらへ向かってきてはマシンを足場に幅寄せして停めた。

どうやら休憩するように獅狼は声を掛けてみた。

「ドーも永雪さん」

「獅狼さん…いかがされましたか?」

「いや、ちよつと声をかけてみようかと…にしてもよくこんな難しそうな操作できてるな」

マシンの操縦席を見ると、アクセルやブレーキはもちろんレーダーなども搭載されて

いて何が何やらまったく分からなかった。

「マシンは操縦すればいいだけでなく、波を読みギアを切り替えるタイミングなども考慮しなければなりませんから」

「うっわあ、考えただけでも頭痛がしてきしそう…それに落ちないようにバランスも大事にしないとイケねえもんな」

「そこに気がつくとは。トレーニングルームの時もそうでしたが、やはり観察力が鋭いですね」

ジェットバトルにおいての基礎に気がついた獅狼に氷織もまた感心してしまう。

そして各選手の元へと回りながら獅狼はジェットバトルについて知識を身につけていくのだった。



そして空が茜色に差し掛かった夕方。

すべてのトレーニングを終えたエレンたちはミーティングをしており反省点や改善

点を上げていく中で獅狼もそれに参加していた。

しかし素人の獅狼は特に意見も出さずに聞いていると、エレンが話を振ってきた。

「さて獅狼。実際にジェットバトルの練習風景を見た感想を聞かせてもらおうかしら」

「えっ」

話を振られた獅狼は一瞬動揺するものの率直な感想を口にした。

「まあその、なんて言ったらいいか……実際のところ生で見れて迫力があるとかそんな感じだ。まだ片足突っ込んでる段階だし、正直そこまでしか出てこねえ……けど、ほんのちよっぴりだけ興味は湧いてきた」

ジェットバトルに対して今まで魅力などを感じて来なかった獅狼だったが、間近で練習を見たことにより少しだけ興味が湧いた。

夢中とまでは行かないもののこのままコーチを続けてもいいと思える程まできた獅狼は改めてエレンたちと向かい合う。

「半ば強制的だけど、コーチとしてやれることはやってやるよ」

「…今はそれでいいわ。取り敢えず、明日からは本格的になるから覚悟なさい」

こうして獅狼はコーチとしての職務を自ら進んでやっていこうと気持ちを切り替えるのだった。